

## 『五体不満足』とマイノリティの戦い

かつてない規模で開催された二〇一二年のパラリンピック。開会式のチケットが大会史上初の完売だったことは日本でも報道されていたようだが、最終的に総計二億七千万枚を売り上げ、五十五億円もの純利益を弾き出した。ほとんどの競技がTVで放映され、視聴率も高く、大いに盛り上がったと申せよう。

様々なことを考えさせられたパラリンピックだった。とりどりの想いが脳内を駆け回った。そしてつい先日、閉会セレモニーを見終わり、自宅の窓から遠くスタジアム上空に咲く花火を眺めながら、いろんなことが腑に落ちた。

たぶん、こんなにも今大会が思考を刺激したのは、この連載のお題のひとつとして、ほぼ並行するように『五体不満足』を読んでいたからだろう。

決して狙ったわけではない。この本がこのタイミングで選ばれたのはただの偶然だ。チョイスの理由も純粋に一般書籍としては(二〇一〇年の段階で)日本第三位の記録を持つ五百五十万部大ベストセラーだからに他ならない。

さて、本書を読んでいるあいだ、わたしはどうにも居心地が悪かった。「それは違うよ乙武くん！」となんども口走りかけ、そのたびに、なんだか自分が悪人になったような気分になったからだ。

目の前にいる相手が困っていれば、なんの迷いもなく手を貸す。(中略)現代の競争社会のなかで、ボクらはこういったあたりまえの感覚を失いつつある。／助け合いができる社会が崩壊したと言われて久しい。そんな「血の通(かよ)った」社会を再び構築しうる救世主となるのが、もしかすると障害者なのかもしれない。(講談社文庫九五ページ)

これを書いたとき彼はまだ早稲田の学生で、若さゆえの理想主義や思慮の浅さがあるのは仕方がないとしても、こういう箇所に出会うと「違うよ！」と言いたくて口がむずむずしてしまう。

自然な相互扶助の感覚が磨耗しつつあるのは、彼が主張するように「常に他人よりも優れていることを求められる」からではない。それは他者を慮る想像力や観察力の問題であり、お粗末な精神的反射神経の弊害ではないか。

じゃないというのなら、それこそ不幸な障害者なのだから、もっと憐れんでくださいなど同情を誘っているに等しい。そんな喚起力を有しているがゆえに障害者は救世主なのだ。

彼は自分を「かわいそう」だなんて思わないでほしい、自分は自分に同情したことなんてない、と繰り返す。が、それでいて、かくのごとき自己矛盾をしばしば露呈する。それどころか

ーボクには、人に負けないものがある。それは、手足がないこと | この言葉の意味を理解で

きる人は、そう多くはないだろう。（八一ページ）

とまで言い切ってしまう。障害者でない人には解らないでしょうが、と。

確かにわたしは同じ障害を持っていない。だから言葉の意味をそのまま体感はできない。でもね、わたしもまた同性愛者という生来のマイノリティであり、マジョリティの仕打ちに傷ついてきた人間だ。手を繋いで歩けば礫を投げる者がいる。石が当たれば痛いくらいは知っている。

世の中には多種多様のマイノリティが存在する。だが、おおまかには二種類のマイノリティに分かれる。隠蔽できないマイノリティと、隠そうと思えば人の目を欺けなくもないマイノリティである。また同時に、視覚的に人に嫌悪感を与えないマイノリティと、生理的な拒絶感を相手に催させるマイノリティにも彼らは二分される。

しかしいかに分類されようと全てのマイノリティに共通するのは、どんなふう生まれついて人も人は平等に扱われるべきだし、少数派である身を恥じる必要など微塵もないって道理。堂々とお日様の下を歩くべき筋道だ。

一ある程度のことであれば、身の回りのことも自分でできてしまう（中略）両親や友達などが「やってあげる」ではなく「あたりまえのこと」として、自然に手助けをしてくれる。障害者だからといって、いじめを受けたこともなければ、何かを制限されたという記憶もない（中略）障害者であるということを自覚する必要も、機会もなかった（一九四ページ）

嘘だろう。とわたしは口にしたい。けれど嘘だと感じた根拠を探り出す前にわたしは口を噤む。噤んだあとで噤んだ理由について検証を試み、もしかしたら彼が障害者だからではないかという疑念に囚われる。そんな疑念を打ち消しながらも悄然としてしまう。それが『五体不満足』の居心地悪さの構図である。

だが今回のパラリンピックが打ち出した峻烈なイコリティの訴求は、この本によって蟠ったもやもやを粉碎してくれた。スタジアムで競い合う選手たちを見て感動するのは、障害者であるにもかかわらず、頑張っているからではない。不自由を強いられ、マイノリティだということを自分の属する社会から痛いほど自覚させられた人々が、それらバッシングの根源である身体的障害を観戦中は忘れさせるほどカッコイイからだ。

彼らの繰り広げる試合や競技が、いかにエキサイティングであり鑑賞に耐え得るかを、大会に参加している障害者たちが身を以て証明したからこそ、人々は挙って高額のチケットを購入した。むしろメディアの積極的な協力もあった。それは人権主義の立場からだけではなく魅力あるコンテンツだと判断したがゆえのサポートであった。

社会が暖かろうが冷たかろうが、そんな関係ない。マイノリティは戦って陽の当たる場所を勝ち取らねばならないものなのである。パラリンピックにエントリーされるほどの努力を続けられる条件と才能が備わった障害者だけのためではない。ただ懸命に生きる数多

のマイノリティたちに陽射しが届くように、彼らは、より速く、より高く、より強く不自由な肉体を駆使して戦う。

イコリティ獲得のために戦うという姿勢、あるいは視点。本人の言葉を信じるならば、障害者であることを自覚する必要も、機会もなかった幸せな乙武洋匡という書き手に欠如していたのは、そんな意識だ。結果として五体揃った大衆のための、愛すべき障害者なる【ゆるキャラ】の公式ブックに本書はなってしまった。もっとも、だからこそ、こんなにも売れたのだろうけど。

非常に障害者らしい障害者である彼が、整った顔で無邪気に微笑むとき、それは逆らえない威力を発揮する。普通に友人と喧嘩もしたと書かれているが、きっと無敗だったろう。対立相手も、さほど勝敗にはこだわらなかったはず。だって勝利と引き換えにワルモノ（の気分）になっちゃうんだから。誰だって正義の味方の側につきたいのが人情だ。

文章を読む限りにおいて自意識過剰気味の彼が、無敵の不戦勝パワーに無自覚だったとはさすがに信じてあげられない。よしんば半ば無意識であっても、その力を存分に行使してきたに違いない。社会的弱者の立場と、天真爛漫の笑顔を賢く利用して要求を通してきたのだ。

現代は血の通わない社会かもしれないが、同時に『人は見た目が9割』が売れてしまう社会でもある。彼の方法論はいうまでもなく正しい。利用できるなら胸を張って弱点を利用すべき。パラリンピックの選手が訓練で培った身体機能を利用するのと変わらない。

経験値の低さから障害者を前に戸惑う人たちにとって『五体不満足』は救済になった。乙武が意図していたか否かはどうでもいいことで、いずれにせよ非常に意味のある仕事を彼は成し遂げた。それだけに、もう一步踏み込んでくれなかったのが惜しまれるのだ。

障害者が自らの障害を武器として利用する。もしかしたらマジョリティにとってそれは耳障りな「不都合な真実」なのだろう。けど、彼にはその正当性が訴えられたのにな。だってクロゼットに閉じ籠ったマイノリティや、外見にコンプレックスを抱えた障害者のほうがより切実に救済を欲しているのだから。

一乙武洋匡は（中略）障害者代表でもなければ、社会に物申すでもない。あくまでも、「自分はこうなんだ」と話しているに過ぎないのだが、どうしても「障害者とは」と語っているように聞こえてしまう。（二七四ページ）

予想外のベストセラーに伴い、我が身に降りかかったジレンマを彼は文庫に書き足している。それらに目を通すと、彼のしなやかな客観性が判る。キャラを演じてきた自己嫌悪や、それが等身大の個性から剥離してしまった焦りなども赤裸々に記している。たぶん本書でいちばん読み応えがあるのは、この加筆部。

大学卒業後ただちに有名スポーツ雑誌で連載を持てたのも、自分が障害者、それも有名な障害者だからだと告白する乙武にわたしは好感を持つ。けど、なんで素直にラッキーを喜べ

ないのかとも思う。開き直って、技術を磨いて、いい仕事をすればいいだけの話ではないか。不利を逆手に取る免罪符がマイノリティの額には捺されているのだ。

シドニー五輪のサッカー選手を追う仕事を貰った彼が、現場に居合わせた他誌の記者に口撃されたエピソードが、そこには紹介されている。礼を尽くして対応しているのにド素人呼ばわりされ腹を立てる乙武に、そいつは「取材者だとかライターだとか言ってるけど、結局はタレントなんだよ。タ・レ・ン・ト！」とまで吐き捨てたのだという。

この経験に傷ついた乙武は、返す言葉もなく当時は書き手としてのモチベーションを悉く失ったと述懐する。それでも、やがて独自性を活かし、得意技のインタビューを駆使して優れたライターになろうと決意して立ち直る。幸あれかしだ。というか恵まれた環境が彼を上々のジャーナリストに育ててくれるだろう。むろん本気で報道の世界に齧りつき続けるならだが。

が、それでも。悪人だと蔑まれてもわたしはここでも「違うよ！」と言いたい。この記者を責めるのは簡単。けれどそいつは読者の仕事ではない。乙武洋匡本人がすべき発言があったはず。

「羨ましいんですか？ どうです、なら手足を切り落としてみてはいかがでしょうか。きっと美味しい仕事がきますよ」一と。卑劣漢にはそのくらいヒットバックしてやっても罰は当たるまい。

もし五輪に出場できなかったスポーツ選手が今年のパラリンピック参加者に似たような因縁をつけてきたとしたら、彼らはきっとそのくらい言っているのけるだろう。マイノリティが強いられる戦いって、そういうもんだからな。

追記 どうやらわたしの危惧は杞憂に終わったようだ。ジャーナリスト乙武洋匡は弥栄ご活躍のご様子。内容はまだ存じ上げないが、それにしても『だいじょうぶ3組』というのはスポーツ・ルポルタージュとしては面白いタイトルである。